

# 『懷風藻』と唐の宮廷詩

加藤 有子

はじめに

前稿では『懷風藻』序が唐の玄宗詩「春晚宴兩相及礼官麗正殿學士」序や『御注孝經』孔安國伝『孝經』などの受容の上で記された部分があると論じた。<sup>(注1)</sup> 本稿ではその玄宗の時代の他の文学からの影響はどうであったかという観点で論じてゆく。

## 一、『懷風藻』の成立時期と唐の宮廷詩

『懷風藻』序文に天平勝宝三（七五一）年に記されたところ。唐では玄宗（七一三～七五六）の時代にあたる。玄宗の即位した七一五年はちょうど元正天皇も即位している。玄宗の即位後の日本といえば、『日本書紀』が成立する頃で、第

九回（七二六年～七三五年）・十回目（七三三年～七三四・七三六・七三九年）の遣唐使の往復や渤海使の入京（七二七年）などがある。

唐では五臣注『文選』の成立（七一八年）、『御注孝經』成立（七二〇年）、詩で言えば中唐から盛唐の頃で、日本人によく知られている王維・李白・杜甫の初期から中期辺りである。また、それらの他に宮廷詩人という存在がある。玄宗朝の初期には張説・蘇頌・張九齡らが中心となっている。現存する唐代前期の宮廷詩の作品数の中で、最多なのが張説であるという。<sup>(注2)</sup>

張説（六六七～七三〇）とは則天武后・中宗・睿宗・玄宗の三帝に仕えた官僚（宰相）である。彼は詩人・文章家としても一流であったという。

稿者がかつて『懷風藻』詩と中宗代の沈佺期・宋之問・上官昭容などの詩との比較を行ったことがあるが、<sup>(注3)</sup> 『懷風藻』

所収詩は多くが中国詩では宮廷詩と呼ばれる詩に分類できる。

唐代の宮廷詩とは皇帝の命に応じる応制（応詔）詩・皇帝が賜る宴席での詔宴詩、皇帝の行幸の際の扈從詩などや皇后や皇太子・皇族の命による応令詩・応教詩なども含まれる。

唐代初期には太宗から玄宗まで文学を愛好する君主を中心に宮廷文壇が形成され、宮廷詩人達が詩作を競い、それが初唐文学の特徴の一つという。<sup>(注4)</sup>

前述のとおり、その宮廷詩の作品数で最多が張説である。張説の書いた詩文を丹念に調べてゆくと、例えば次のような例が見受けられる。上段が『大唐西域記』叙（序）で、下段が『懷風藻』序である。

### 『大唐西域記』叙

尚書左僕射燕國公張說製

『懷風藻』序

是以

慧日淪影。像化之跡東歸。

帝猷宏闡。大章之步西極。

弘闡皇猷。（第2段）

### 卷一 冒頭箇所

（前略）

『懷風藻』序

逖聽前修。

逖聽前修。（冒頭）

（中略）

乾坤之覆載。

（中略）

觀載籍。

退觀載籍。（冒頭）

道格乾坤。（第二段）

『大唐西域記』叙の作者「尚書左僕射燕國公張説」は前述の張説である。右に示しただけでも類似点がいくつか見受けられる。しかし右の指摘のみで影響関係までを明言することはできない。ここでは張説の時代の文章が『懷風藻』序の用語使用のレベルと近似している例として上げることとする。

その他の張説の詩文を比較すると、一単語レベルでの類似はかなり確認できる。それらの類似を調べ並べていくうちに、次の詩群の調査を始めることになった。

それは玄宗の「送張説巡邊」詩に応じ張説が「將に朔方軍に赴かんとす應制」詩を作り、源乾曜・張嘉貞・賀知章・張九齡・除堅ら二十人の廷臣が作った「奉和聖製張説巡邊」詩群（以下「送張説巡邊」詩群と略す）である。それらの二十首の内の一首、韓休作をあげる。

「奉和聖製送張説巡邊」韓休

一德光台象、三軍掌夏卿。來威申廟略、出總礪師貞。  
受鉞辭金殿、憑軒去鼎城。曙光搖組甲、疏吹繞雲旌。  
左律方先凱、中鼙即訓兵。定功彰武事、陳頌紀天聲。  
祖宴初留賞、宸章更寵行。車徒零雨送、林野夕陰生。

路極河流遠、川長朔氣平。東轅遲返旆、歸奏謁承明。

この詩を読んだ時、稿者は大津皇子「遊獵」詩を想起した。次に「遊獵」詩をあげる。

「五言。遊獵。一首。」大津皇子

朝擇三能士。暮開萬騎筵。喫嚙俱豁矣。傾蓋共陶然。

月弓輝谷裏。雲旌張嶺前。曦光已隱山。壯士且留連。

大津皇子「遊獵」詩に見える(あ)「三能」とは「三台星」のこと。『文選』「月賦」「增華台室」の李善注に「台室。三公。(中略)名曰三能。能。古台字也」(台室は三公なり。(略)名を三能と曰ふ。能は古の台の字なり)とあり、他にも李善は度々「台」の字が星であり、「能」であることを注している。

それについて、既出論文には杉本『懷風藻』が「三能士」を、三台に同じ。星の名なり。(中略)故に天子の三公に喩ふ。併し茲は唯芸能の秀でたる士の意に用ひたり。

とし、『懷風藻研究』注釈編でも「三能」は「三台」で「星」として、

それが勝れた才能を持つ臣下に充てられたのである。ここでは狩りの能力を持つ勇士

と説明している(注6)。稿者が中国の資料を調査するかがぎり、大津皇子(あ)「三能」は「三台星」と解釈するのが妥当であるが、なぜ狩りに同行する者達を「三能士」と詠んだかが不明瞭である。

ここに先述の韓休詩(ア)「台象」を加えて考えたらどうであろうか。韓休(ア)「台象」は「三台」(三能)と同義である。

「台象」の「台」は「三台」の「台」であり、星のことである。前述『文選』「月賦」が「能」と「台」が同じであるとし、『文選』王元長「永明十一年策秀才文」では「台象」李善注が「春秋漢合孛」をひき「法三台也」とある。

韓休詩の初句に三台星である「台象」が用いられたのは、玄宗「張説の邊を巡るを送る」詩の「三台入武帳」(三台は武帳に入る)を受けてのことである。同詩群には同じく玄宗の「三台」を受け

袁暉 「分闔用三台」(闔を分け三台を用いる)

張九齡 「天與三台座」(天は三台の座を与える)

などとある。大津皇子(あ)「三能」も、宮廷詩と見た場合

天皇などの御製作詩に奉和しものと見ることまでできるが、韓休詩(ア)「台象」をはじめとする玄宗詩の「三台入武帳」を受けた詩群を参考にした可能性を提示できる。

つづいて韓休詩の(イ)「曙光」は、大津皇子「遊獵」詩(い)「曙光」の関連語である。唐詩では「曙」(あけぼの)は「曦」(日の光)とともに用いられる。「曦光」は『全唐詩』の韓愈「同宿聯句」詩中「曦光霽物、景曜鏘宵鉞」(曦光 霽物霽み)を参考にすると解りやすい。ちなみに『全唐詩』に「曦光」は右韓愈詩が孤例のため、時代がやや降るが例示した。「光曦」では李嶠詩にも例があるがここでは省く。

大津皇子(い)「曦光已隱山」は韓休詩(イ)「曙光搖組甲」周辺の文学を基にした翻意や創作の可能性がある。

次に(ウ)(う)共通「雲旌」とは何か。『大漢和』によると「旌」は「はた」。原義的には「天子が士気を鼓舞するに用ひる」らしいが、「使臣のしるし。節」などともある。諸注では大野『研究』が唐・王勃の「乾元殿頌」と「呂氏春秋」季夏紀をあげる。『呂氏春秋』は通行本が「雲旌」をとるためここではあげない。王勃「乾元殿頌」は、

帝圖臨御。皇僚萃止。電戟揮霜。雲旌拒晷。  
紫宮可逼。黃街易履。鳳礎騰文。麟庭抗禮。

とある。稿者の調査によるとこの他の用例に、

宋・鮑照 「石帆銘」 「雲旌未起。風柯不吟」  
唐・盧照鄰 「釋疾文」 「於是排雲旌兮叫諸闕。登紫翠兮伏瑤壇」

唐・李昂 「乘石賦」 「流星旆以燭日。儼雲旌而翬霧」

などともあるが、いずれも文の使用例である。これらが大枠で解釈すると「雲旌」は「多くの旌」としての意味で「群臣達の旌」を示すものが多い。これらからすると大津皇子(う)「雲旌」は嶺まで連なる群臣達の旗がたなびいている様と考えることができる。

ところで中国の詩文(唐まで)を精査すると、稿者は散文は散文の叙述傾向や用字傾向があり、韻文は韻文での傾向があると認識している。その上で、次に韻文の例として韓休(ウ)「雲旌」を考察する。

韻文中の用例を『全唐詩』中で検索すると、それが韓休詩(ウ)「雲旌」一例のみである。韻文としての用例は偏る語であると言える。

前述の通り、韓休(ウ)「雲旌」は前掲の玄宗の詩に「旌軒溢洛陽」(旌軒は洛陽に溢れる)とあるのに奉和した表現である。韓休の他に「送張說巡邊」詩群の中には、

許景先「郊雲駐旌羽」（郊雲は旌羽に駐まる）  
袁暉「旌旗曉雲送」（旌旗は曉雲を送る）

などとあり、玄宗詩を受けた類型表現がある。同詩群には「旌」のみの使用例では右の二例の他に九例あり、いずれも玄宗の詩句に応じて表現を模索したものである。これらは宮廷詩の様式とも言える。実景よりも皇帝やその周辺の人物達の詩作表現を受けての作詩が作詩の基本におかれ、詩群全体として詩語が類似するのが一般的である。

ここでも、玄宗が作詩段階に「雲」や「旌」を見ていて、仮に二十人の臣下（詩人）からは見えていなくとも、玄宗の見た景を受けての作詩となる。宮廷詩としては皇帝・玄宗の詩語を基本に作るからである。二十人の詩人にとってはある意味概念的な景の時もある。

大津皇子「遊獵」詩は天皇周辺の「遊獵」に従った際の作詩と考えられる。「遊獵」詩も韓休詩のような宮廷詩と捉えた場合、大津皇子（う）「雲旌」も天皇やその周辺の詩歌に応じて作られた可能性もある。実景だけではない可能性がある。また、実際の「遊獵」の際の作詩ではなく、唐の宮廷詩を習って後日作詩された可能性も否めない。

次に韓休詩（エ）「祖宴初留賞」（宴のために留まって賞美する）は大津皇子「遊獵」詩（え）「壯士且留連」の「留連」（留まって連なる）一獵での宴のためにの類語である。どち

らも留まって宴を楽しむ事である。

以上の内容をまとめると、

大津皇子（あ）「三能」（い）「曦光」（う）「雲旌」

（え）「留連」

韓休（ア）「台象」（イ）「曙光」（ウ）「雲旌」

（エ）「留賞」

はそれぞれ影響関係にあると考えてよいのではないか。

二、「懷風藻」大津皇子詩と「送張説巡邊」詩群周辺

次に前述してきた「送張説巡邊」詩群をあげる。詩の順序は『全唐詩』掲載順。○の番号は『張燕公集』の順。（無）は『張燕公集』になし。詩題は『全唐詩』をとり、文字異同は本稿では省く。

送張説巡邊 明皇帝

端拱復垂裳、長懷御遠方。股肱申教義、戈劍靖要荒。

命將綏邊服、雄圖出廟堂。三台入武帳、八座起文昌。

寶胄匡韓主、華宗輔漢王。茂先慚博物、平子謝文章。

盡節恢時佐、輸誠禦寇場。三軍臨朔野、駟馬即戎行。

鼓吹威夷狄、旌軒溢洛陽。雲臺先著美、今日更貽芳。

① 奉和聖製送張說巡邊 崔日用（16）

軒相推風后，周官重夏卿。廟謀能允迪，韜略又縱橫。  
吉日四黃馬，宣王六月兵。擬清雞鹿塞，先指朔方城。  
列將懷威撫，匈奴畏盛名。去當推轂送，來佇出郊迎。  
絕漠蓬將斷，華筵種正榮。壯心看舞劍，別緒應懸旌。  
睿錫承優旨，乾文復寵行。暫勞期永逸，赫矣振天聲。

② 奉和聖製送張說巡邊 宋璟（3）

帝道薄存兵，王師尚有征。是關司馬法，爰命總戎行。  
畫闔崇威信，分麾盛寵榮。聚觀方結轍，出祖遂傾城。  
聖酒江河潤，天詞象緯明。德風邊草偃，勝氣朔雲平。  
宰國推良器，為軍挹壯聲。至和常得體，不戰即亡精。  
以智泉寧竭，其徐海自清。遲還廟堂坐，贈別故人情。

③ 奉和聖製送張尚書巡邊 崔泰之（無）

南庭胡運盡，北斗將星飛。旗鼓臨沙漠，旌旄出洛畿。  
關山遶玉塞，烽火映金微。屢獻帷謀策，頻承廟勝威。  
躡蹠臨河騎，逶迤度隴旂。地脈平千古，天聲振九圍。  
車馬生邊氣，戈鋌駐落暉。夏近蓬猶轉，秋深草木腓。  
餞送紆天什，恩榮賜御衣。佇勒燕然頌，鳴騶計日歸。

④ 奉和聖製送張尚書巡邊 源乾曜（1）

匈奴邇河朔，漢地須戎旅。天子擇英才，朝端出監撫。

流星下閭闔，寶鉞專公輔。禮物生光輝，宸章備恩詔。

有征視矛戟，制勝唯樽俎。彼美何壯哉，桓桓擅斯舉。  
聲華振臺閣，功德標文武。奉國知命輕，忘家以身許。  
安人在勤恤，保大殫襟腑。此外無異言，同情報明主。

⑤ 奉和聖製送張說巡邊 徐堅（15）

至德撫遐荒，神兵赴朔方。帝思元帥重，爰擇股肱良。  
累相承安世，深籌協子房。寄崇專斧鉞，禮備設壇場。  
鼙鼓喧雷電，戈劍凜風霜。四駢將戒道，十乘啟先行。  
聖錫加恆數，天文耀寵光。出郊開帳飲，寅餞盛離章。  
雨濯梅林潤，風清麥野涼。燕山應勒頌，麟閣佇名揚。

⑥ 奉和聖製送張尚書巡邊 胡皓（無）

燕公為漢將，武德奉文思。利用經戎莽，英圖礪聖詒。  
寒沙制長策，窮石卷搖旗。萬里要相賀，三邊又在茲。  
稜威方逐逐，談笑坐怡怡。寵餞紛郊道，充廚竭御司。  
嘗醑企行邁，聽樂罷漣洏。袞旒垂翰墨，纓蕤迭賦詩。  
金山無積阻，玉樹有華滋。請迨炎風暮，歸旌候此時。

⑦ 奉和聖製送張說巡邊 韓休（6） 前掲省略

⑧ 奉和聖製送張尚書巡邊 許景先（5）

文武承邦式，風雲感國禎。王師親賦政，廟略久論兵。

漢主知三傑、周官統六卿。四方分闔受、千里坐謀成。  
介冑辭前殿、壺觴宿左營。賞延頒賜重、宸贈出車榮。  
龍武三軍氣、魚鈴五校名。郊雲駐旌羽、邊吹引金鉦。  
訓旅方稱德、安人更克貞。佇看銘石罷、同聽凱歌聲。

⑨ 奉和聖製送張尚書巡邊 王丘（無）

德業蘊時宗、幽符夢象通。台司計祈父、師律總元戎。  
出入敷能政、謀猷體至公。贈行光睿什、宴別感宸衷。  
文炳高天曜、恩垂湛露融。建牙之塞表、鳴鼓接雲中。  
策密鬼神秘、威成劍騎雄。朔門正炎月、兵氣已秋風。  
肅殺從此始、方知胡運窮。（諸篇十韻、此止九韻。）

⑩ 奉和聖製送張說巡邊 蘇晉（10）

方漢比周年、興王合在宣。亟聞降虜拜、復睹出師篇。  
祈父萬邦式、英猷三略傳。算車申夏政、芟舍啟戎田。  
嚴問盟胡苑、軍容濟洛川。皇情悵關旆、詔餞列郊筵。  
路接禁園草、池分御井蓮。離聲軫去角、居念斷歸蟬。  
三捷豈云爾、七擒良信然。具僚誠寄望、奏凱秋風前。

⑪ 奉和聖製送張說巡邊 崔禹錫（8）

供帳何煌煌、公其撫朔方。群僚咸餞酌、明主降離章。  
關塞重門下、郊岐禁苑傍。練兵宜雨洗、臥鼓候風涼。  
炎景寧云憚、神謀肅所將。旌搖天月迴、騎入塞雲長。

赫赫皇威振、油油聖澤滂。非惟按車甲、兼以正封疆。  
叱吒陰山道、澄清瀚海陽。虜垣行決勝、台座行為光。

⑫ 奉和聖製送張說巡邊 張嘉貞（2）

天錫我宗盟、元戎付夏卿。多才兼將相、必勇獨橫行。  
經緯稱人傑、文章作代英。山川看是陣、草木想為兵。  
不待河冰合、猶防塞月明。有謀當繫醜、無戰且綏氓。  
闔外傳三略、雲中冀一平。感恩同義激、悵別屢魂驚。  
直視前旌掣、遙聞後騎鳴。還期方定日、復此出郊迎。

⑬ 奉和聖製送張說巡邊 盧從愿（4）

上將發文昌、中軍靜朔方。占星引旌節、擇日拜壇場。  
禮樂臨軒送、威聲出塞揚。安邊俟帷幄、制勝在巖廊。  
作鼓將軍氣、投醪壯士觴。戒途遵六月、離贈動三光。  
槐路清梅暑、蘅皋起麥涼。時文仰雄伯、耀武震遐荒。  
枉席知無戰、兵戈示不忘。佇聞歌杖杜、凱入繫名王。

⑭ 奉和聖製送張尚書巡邊 袁暉（12）

出師宜九命、分闔用三台。始應幕中畫、言從天上來。  
丹青不獨任、韜略遂雙該。坐見威稜洽、彌彰事業恢。  
旌旗曉雲送、鞞鼓朔風催。虜氣消殘月、邊聲韻落梅。  
羽書雄北地、龍漠寢南垓。寵戰黃金盡、輪誠白日迴。  
離章宸翰發、祖讎國門開。欲識恩華盛、平生文武材。

⑮ 奉和聖製送張說巡邊 王光庭（11）

賢相德符充、朝推文武雄。海波先若鏡、關草豫從風。  
鉞助將軍勇、威成天子功。瓊章九霄發、錫宴五衢通。  
玉輶龍盤帶、金裝鳳勒聰。虎貔紛儼儼、河洛振熊羆。  
戈劍千霜白、旌旗萬火紅。示刑夷夏變、流惠鬼方同。  
寇息軍容偃、塵銷朔野空。用師敷禮樂、非是為獯戎。

⑯ 奉和聖製送張說巡邊 徐知仁（7）

聖德膺三統、皇恩被八埏。大明均照物、小醜未寧邊。  
國相台衡重、元戎廟略宣。紫泥方受命、黃石乃推賢。  
問罪陰山下、安人屬國前。度關行照月、乘障坐消煙。  
北關紆宸藻、南橋列祖筵。耀威當夏日、殺氣指秋天。  
鞞鼓鼉鼉振、旌旗鳥獸懸。由來詞翰手、今見勒燕然。

⑰ 奉和聖製送張說巡邊 席豫（13）

聖主重兵權、分符屬大賢。中軍仍執政、丞相復巡邊。  
翕習戎裝動、張皇廟略宣。朝榮承睿札、野餞轉行旃。  
亭障東緣海、沙場北際天。春冬見巖雪、朝夕候烽煙。  
已勒封山記、猶聞遺戍篇。五營將月合、八陣與雲連。  
經略圖方遠、懷柔道更全。歸來畫麟閣、藹藹武功傳。

⑱ 奉和聖製送張說巡邊 賀知章（17）

荒憬盡懷忠、梯航已自通。九攻雖不戰、五月尚持戎。

遣戍征周牒、恢復重漢功。選軍命元宰、授律取文雄。  
胄出天弧上、謀成帝幄中。詔旂分夏物、專土錫唐弓。  
帳宿伊川右、鉦傳晉苑東。蠻人藉賁實、樂正理絲桐。  
岐陌涵餘雨、離川照晚虹。恭聞詠方叔、千載舞皇風。

⑲ 奉和聖製送張尚書巡邊 王翰（9）

紫綬尚書印、朱軒丞相車。登朝身許國、出閫將辭家。  
不憚炎蒸苦、親嘗走集除。選徒軍有政、誓卒爾無譁。  
帝樂風初起、王城日半斜。寵行流聖作、寅餞照台華。  
騎歷河南樹、旌搖塞北沙。榮懷應盡服、嚴殺已先加。  
業峻靈祇寶、功成道路嗟。寧如鑿空使、遠致石榴花。

⑳ 奉和聖製送尚書燕國公赴朔方 張九齡（14）

宗臣事有征、廟算在休兵。天與三台座、人當萬里城。  
朔南方偃革、河右暫揚旌。寵錫從仙禁、光華出漢京。  
山川勤遠略、原隰軫皇情。為奏薰琴唱、仍題寶劍名。  
聞風六郡伏、計日五戎平。山甫歸應疾、留侯功復成。  
歌鍾旋可望、枉席豈難行。四牡何時入、吾君憶履聲。

右の詩群を参考に、上段が大津皇子「遊獵」詩、下段が「送張說巡邊」詩群で分けて比較を示す。第一節に論じた部分も含める。※印で本詩群になく、別の詩句参考になるものもあげた。

「遊獵」詩

朝擇三能士

……

「一德光台象」(韓休)

「三台入武帳」(玄宗ほか二詩)(三)

台北三能)

「天子擇英才」(源乾曜)

暮開萬騎筵

※「遍野屯萬騎」(太宗「還陝述懷」

ほか)

喫齋俱豁矣

……

次稿にて論ず

傾盞共陶然

……

「投膠壯士觴」(盧從愿)(蓋北觴)

月弓輝谷裏

……

「旌搖天月迴」(「月」は崔禹錫ほか

四詩)

※「關城罷月弓」(太宗「執契靜三

邊」)

雲旌張嶺前

……

「疏吹繞雲旌」(韓休)

曦光已隱山

……

「曙光搖組甲」(韓休)

(※韓愈「曦光」)

壯士且留連

……

「祖宴初留賞」(韓休)

「投膠壯士觴」(盧從愿)

「送張說巡邊」詩群全体の中で、大津詩・初句「朝擇三能士」の「擇」の参考になるのは、

盧從愿「占星引旌節、擇日拜壇場」

源乾曜「天子擇英才、朝端出監撫」

とある。右の二例目・源乾曜の詩では朝廷の「英才」を「擇」んでいる。「三能」は前述、星の意味から「それが勝れた才能を持つ臣下に充てられた」と解され優秀な人物達を指す。「英才」と置き換えられる。大津詩「朝擇三能士」はこの源乾曜「天子擇英才」が先行してあったと考えた方がわかりやすい。

大津皇子第二句目「暮開萬騎筵」「萬騎」については、「文選」「子虛賦」他、六朝の詩賦に度々用いられている。唐に入っても太宗「還陝述懷」詩「遍野屯萬騎」を始めとして使用例は多い。太宗の詩も辺塞での詩作である。しかし同様な「送張說巡邊」詩群には「萬騎」の例はない。参考例として、

崔禹錫「騎入塞雲長」

張嘉貞「遙聞後騎鳴」

王翰「騎歷河南樹」

王丘「威成劍騎雄」

などがあり、大津皇子と近似した作詩状況を想定できる。また張説が右の「朔方」の前に巡回した「雀鼠谷」へ出発の際に作られた「奉和聖製答張說扈從南出雀鼠谷之作」詩群中、袁暉の「九旗雲際出、萬騎谷中来」が参考になる。

また大津皇子・同「暮開萬騎筵」詩群中「筵」に關しては、

韓休 「祖宴初留賞」

徐知仁 「南橋列祖筵」

とある。同じ宴席で韓休は「宴」とし、徐知仁は「筵」の語を用いている。

次に大津皇子「遊獵」詩・第五句目「月弓輝谷裏」に關して「送張說巡邊」詩群で参考になるのは、

崔禹錫 「旌搖天月迴、騎入塞雲長」

王丘 「朔門正炎月、兵氣已秋風」

張嘉貞 「不待河冰合、猶防塞月明」

徐知仁 「度關行照月、乘障坐消煙」

席豫 「五營將月合、八陣與雲連」

である。この詩群には月に關する表現が多い。これらは唐詩によく詠まれる「關山の月」などに類するだろう。「關山の月」とは「辺境の月」のことで、ほとんどが辺塞で月を仰ぎ古郷を思う詩といえる。同詩群では張説が節度使として辺塞に向かうため、それに近い表現が選り取られたものと見られる。

小島憲之氏が大津皇子「遊獵」詩の解釈において指摘する

「月弓」の代表的な例としては、太宗皇帝「執契靜三邊」詩「關城罷月弓」があるが、これも辺塞で月を仰ぎ作詩したものである。また『全唐詩』中には他に、

盧照鄰 「結客少年場行」詩

「金鞭明月弓」

楊炯 「送劉校書從軍」詩

「烏號明月弓」

李白 「送梁公昌從信安北征」詩「行歌明月弓」

などである。これらも「送張說巡邊」詩群と同じく、辺境警備やその行軍の様子を描く中に詠み込まれた「月」である。

大津皇子「遊獵」詩・第五句目「月弓輝谷裏」は太宗皇帝「執契靜三邊」詩「關城罷月弓」を始め、「送張說巡邊」詩群を含めた「辺塞で月を仰ぐ」詩の類型の中にあると言える。

次に大津詩・結句「壯士且留連」の「壯士」に關して「送張說巡邊」詩群では、

盧從愿 「作鼓將軍氣、投醪壯士觴」  
崔日用 「壯心看舞劍、別緒應懸旌」

などである。特に盧從愿の「壯士觴」については、「觴」（さかづき）が大津詩第四句「傾蓋共陶然」の「蓋」（さかづき）にもつながる。他の文献で「壯士」は『文選』「羽獵賦」に「壯士」が獲物を追う描写もある。その他の詩句にも「壯士」

の語自体はよく用いられる。

以上のように、大津皇子「遊獵」詩は、韓休詩を含む「送張説巡邊」詩群をまとめて一覽できる人間によって作られたと考えるべきではないか。

このような詩群としての中国詩の受容方法としては、古くは吉川幸次郎氏の指摘を受け、高潤生氏が釋弁正「与朝主人」詩（二六）と金城公主詩群の比較を論じ、李滿紅氏は紀男人「扈從吉野宮」詩（七三）と長寧後主詩群・林宇氏は「初春左僕射長王宅讌」（七五）と高氏宴詩群でも説かれてい（註10）る。稿者も久しく「懷風藻」詩は六朝や唐の詩群を、詩群として閲覽できる状況下で作られたのではないかと論じてき（註11）た。大津皇子「遊獵」詩に関しても、そのような詩群の受容の流れの中にある詩であると言える。

しかし、大津皇子の没年は持統即位前紀朱鳥元（六八六）年、張説が朔方軍節度使になるのが開元一〇（七二二）年である。玄宗と韓休はか十九人の「送張説巡邊」詩群はその激励の宴で作られた。年代としては逆である。

旧来小島憲之氏以下の多くの研究者は大津皇子「臨終」詩が本人刑死の際に作詩されようはずもないと説いている。大津皇子「臨終」詩は「大津皇子物語」が生成される過程で生まれた詩の一つと論じられてきている。同じく「遊獵」詩も大津皇子自身の実作ではなく大津皇子の生涯を後世の人間が「物語化」していく歴史の中で作られたか、別作者作詩が拾

われたと見た方が良いだろう。また、大津皇子「遊獵」詩は内容からは同時代の唐の宮廷詩の様式と表現を受けて成立したものと定義できる。

ところで、この開元一〇（七二二）に成ったという「送張説巡邊」詩群はいつ日本に渡って来たのであろうか。「懷風藻」成立の天平勝宝三（七五一）年までに詩を採集した場合を考えると、その間二十九年の期間をどうみるべきか。

玄宗周辺詩は宮廷詩のため、早い段階で公開され、書写或いは謄模されていたとしても、それが海を渡ると考えると非常に短い期間である。

仮に正式ルートの遣唐使が持ち帰ったとするのなら、天平五（七三三）〜七三六・七三九）年派遣の第十回遣唐使派遣以降しかありえない。以降と書いたのは、「懷風藻」序文の紀年を信じない場合をも想定してみたときである。紀年を信じて第十回遣唐使派遣によると考えた場合、序文による「懷風藻」成立の天平勝宝三（七五一）年との間隔は一八年未満となる。

また、当時は朝鮮半島や渤海經由の文献も少なからずあったと言われている。渤海使は神亀四（七二七）年に入京しており、手土産に唐の新旧の文献を随携していた可能性もある。その中に当時の最新の辺境警備情勢に関連したこの詩群が混じっていたとも推測もできる。更に、この頃以降には商船も往来していたという。その前代に商船の可能性が全くな

いとは言い切れない。

稿者は拙稿（一九九九年）で『懷風藻』序文の一部分に玄宗の詩序の影響にあると論じた<sup>〔註5〕</sup>。玄宗の詩序は開元一三（七二五）年成立である。本稿で指摘した開元一〇（七二二）年の詩群は、この三年前にあたる。「大津皇子物語」（『懷風藻』所収の大津皇子詩）の成立は『懷風藻』序文の成立と非常に近い時期であるように見えてくる。

本節では、前節で大津皇子「遊獵」詩が玄宗と臣下による「送張説巡邊」詩群の影響を受けていることを指摘した。

## おわりに

第一節では玄宗と臣下による「送張説巡邊」詩群のうち、韓休詩と大津皇子「遊獵」詩との比較を行った。大津皇子大津皇子「遊獵」詩と韓休詩は影響関係があるとみるべきだろう。

第二節では「送張説巡邊」詩群全体をあげた。本詩群全体がみられる状況下で大津皇子「遊獵」詩の作詩が行われたと稿者は考えている。

ある詩群の中から一つの詩を作る方法としては、『懷風藻』中には他にも例がある。

※本稿における本文は、『懷風藻』は日本古典文学大系『懷風藻』華秀麗集本朝文粹（岩波書店）、『日本書紀』『風土記』は新編日本古典文学全集（小学館）を用いた。また『全唐詩』『先秦漢魏晋南北朝詩』『全上古三代秦漢三國朝文』は中華書局、『全唐文』は中文出版本を用いた。『張燕公集』は上海古籍出版社、類書は『北堂書鈔』文海出版社、『藝文類聚』『初学紀』中文出版を用いた。仏教関係文献は『大正新修大藏經』（大正新修大藏經出版会）を参考にした。

※本稿が参考にした諸注とその略称は以下の通りである。

- ・ 釈清譚『懷風藻新釈』（丙午出版社）……釋清譚『新釈』
- ・ 佐久節『校註日本文學大系 懷風藻』（誠文堂）……『校註』
- ・ 林古溪『懷風藻新註』（バルトス社）……林『新註』
- ・ 澤田總清『懷風藻註釋』（大岡山書店）……澤田『註釋』
- ・ 杉本行夫『懷風藻』（弘文堂）……杉本『懷風藻』
- ・ 小島憲之『懷風藻（下略）』（岩波書店）……小島『大系』
- ・ 江口孝夫『懷風藻』（講談社）……江口『懷風藻』
- ・ 辰巳正明『懷風藻全注釈』（笠間書院）……辰巳『全注釈』
- ・ 土佐朋子『懷風藻箋註本文と研究』（汲古出版）『箋註』
- ・ 『大漢和辞典』（大修館書店）……『大漢和』

※本稿の資料の収集は、主に台湾の「中央研究院漢籍電子文獻」「寒泉古典文獻全文檢索資料庫」における檢索結果を参考にさせていただいた。また、「古籍全文檢索資料叢書」の『先秦漢魏晋南北朝詩』『全上古三代秦漢三國朝文』『全唐詩』『全唐文』の檢索結果も参考にした。

〔注〕

- (1) 拙稿『懐風藻』序の構成―比較文学的立場から―『日本文学研究』第六三号・二〇二四年
- (2) 高木重俊「文人張説」『張説 玄宗とともに翔た文人宰相』大修館書店・二〇〇三年
- (3) 拙稿「唐の公主と『懐風藻』」『日本文学研究』第五四号(二〇一五年)
- (4) 前出(1)に同じ
- (5) 大正新脩大藏経『大唐西域記』
- (6) 『懐風藻研究』第九号・日中比較文学研究会・二〇〇二年
- (7) 吉川幸次郎。小島『大系』月報「吉川博士は、この詩について和蕃公主を背景とした詩かとの新見を示される」。(一九六二年)
- (8) 高潤生「『懐風藻』と中国文学―积弁正「与朝主人」詩考―」『皇学館論叢』第二七卷第五号(一九六四年)
- (9) 李滿紅「紀男人「扈從吉野宮」詩における上官昭容詩の受容」平成三一年一月上代文学会例会(二〇一九年)
- (10) 林宇「『懐風藻』詩における『高氏三宴詩集』の受容―七五番詩の分析を手掛かりに―」平成三十年十月上代文学会秋季大会発表による
- (11) 前出(3)
- (12) 小島憲之「近江朝前後の文学―大津皇子臨終詩を中心として―」『万葉以前』(岩波書店)・浜政博司「大津皇子『臨終』詩群の解釈」和漢比較文学叢書第九卷『万葉集と漢文学』(汲古書院)以降の論。
- (13) 王勇「遣唐使時代のブックロード」『アジア遊学』第三号
- (14) 前出(13)に同じ
- (15) 前出(1)に同じ
- (二九九九年)